

外国雑誌センター館活動評価(2010年度版)

外国雑誌センター館活動評価(2010年度版)では、外国雑誌センター館(以下「センター館」という)の活動について、従来どおり「レア・ジャーナル¹の収集」と「文献複写サービスの提供」を中心に分析・評価を行った。

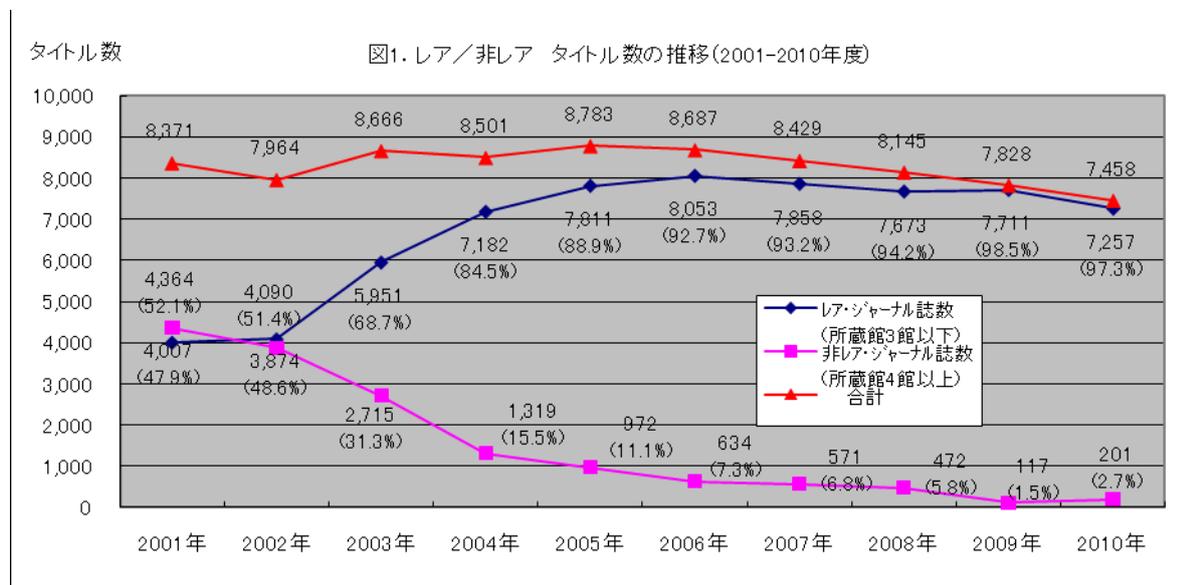
分析・評価にあたっては、各センター館から提出されたデータを集計し、センター館全体の過去10年間の活動の推移をまとめて、それを基に分析を行っている。

なお、センター館のNACSIS-ILLシステム(以下「ILLシステム」という)経由の文献複写サービスのデータは、国立情報学研究所(以下「NII」という)の協力により毎年提供を受けており、各年4月現在のものである。その他のILLシステム関係のデータは、NIIがホームページで公開しているNACSIS-ILL統計情報に依っている。

1. レア・ジャーナルの収集について

(1) 所蔵館数別タイトル数の推移

毎年の雑誌購読価格上昇を受け、センター館誌数は2005年度をピークに漸減している。センター館誌全体に占めるレア・ジャーナルの割合は2003年度に7割近くに達し、それ以降ほぼ増加を続けており、ここ2年では95%以上と所蔵雑誌のほぼすべてがレア・ジャーナルとなっている(図1)。



¹ 「レア・ジャーナル」とは、収集が困難あるいは国内の継続所蔵館数が3館以下の外国雑誌とする。

(2) タイトルの中止と新規購入

センター館では2005年度²以降も毎年、タイトルの4～7%(所蔵数比)を中止し、新規タイトルの購入を行っている(表1)。その結果、(1)で述べたように所蔵タイトルのほとんどがレア・ジャーナルで占められるに至った。また、レア・ジャーナルについても、毎年タイトルの中止を行っている(表2)。これは、各館とも継続して、雑誌の利用状況を見ながら購入タイトルの検討・入れ替えを行っているためである。

なお、外国雑誌の契約手続きは年単位であり、所蔵館増加による購入中止の検討開始から実際の中止までに複数年が必要となるため、今後も非レア・ジャーナル全点の中止は難しいと思われる。

表 1. 新規タイトル数・所蔵館数別中止タイトル数の推移(2006-2011 年度)

	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年
中止 レア・ジャーナル (所蔵 3 館以下)	465	433	581	302	323	293
中止 非レア・ジャーナル (所蔵 4 館以上)	177	109	135	122	127	25
中止 合計	642	542	716	424	450	318
新規タイトル数	665	396	491	239	153	

*2011年新規タイトル数は調査時点では未定であった

(3) 電子ジャーナルの購入

電子ジャーナルの普及に伴い、レア・ジャーナルについても電子化の動きが顕著である。平成20年度の外国雑誌センター館会議で、従来の冊子に加え電子ジャーナルもセンター館誌として収集の対象とすることが確認された。これに伴い、2009年度よりセンター館誌の電子ジャーナルの契約状況についての調査を開始した。

2010年度のセンター館誌7,458誌中で、電子ジャーナルのみを契約しているのは109誌(1.5%)、冊子だけで契約可能であるが電子ジャーナルも追加して契約しているものは133誌(1.8%)である。また、契約に初めから電子ジャーナルが含まれるものは736誌(9.9%)。センター館誌の電子版が自図書館の電子ジャーナルパッケージ契約に含まれているものは、カウント可能なものだけで884誌(11.9%)あった。電子ジャーナルの契約形態にはさまざまな種類があり分類・カウントが難しいが、今後も方法を検討し調査したい。なお、冊子体のみを契約している雑誌の中にも電子ジャーナルはオープンアクセスとなっているものがあり、かなりの数のセンター館誌が電子ジャーナルを利用できる状況である。

以上の結果から、センター館は国内未収集の外国雑誌の収集・整理において十分な役割を果たしているといえる。ただ、今後のセンター館の新たな役割を現在模索しているところであり、収集誌数・中止数に変化が生じる可能性や、収集誌の形態に関しても電子ジャーナルが増加する可能性が考えられる。

2. 文献複写サービスの提供について

(1) ILLシステム経由文献複写サービスの全般的な利用動向

ここでは、NACSIS-ILL文献複写サービス全般の利用について傾向を述べる。データは、NIIホームページ上の「NACSIS-ILL統計情報」に依る。

² センター館では、2001年7月に「外国雑誌センター館資料収集方針」を申し合わせ、より効率的・効果的な収集を目指し、2001年度から2005年度の5年間をかけて収集誌の整理・見直しを行った。

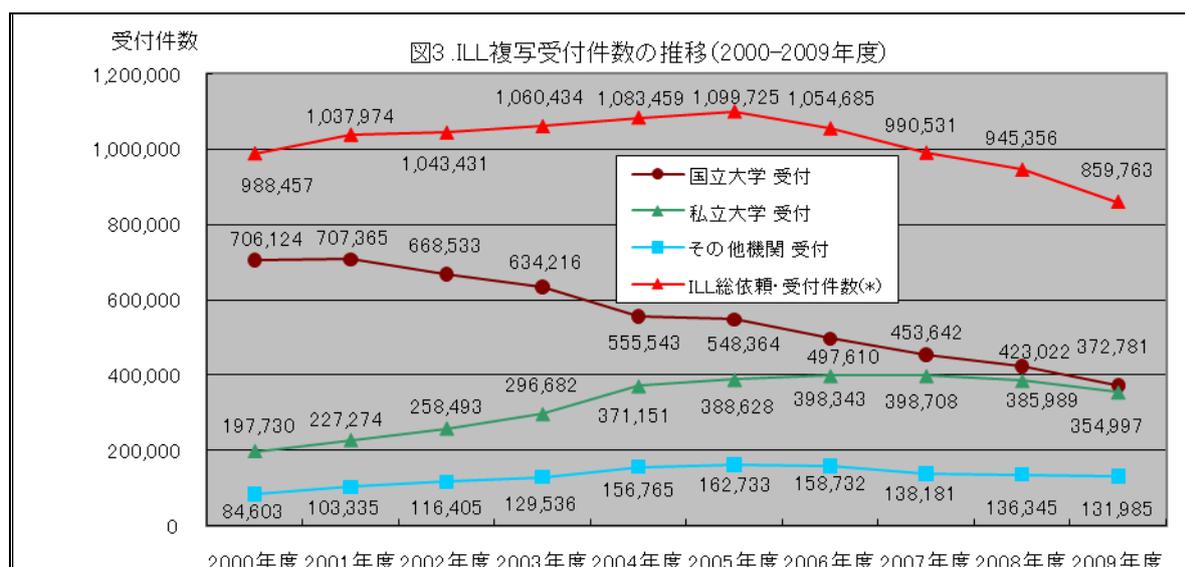
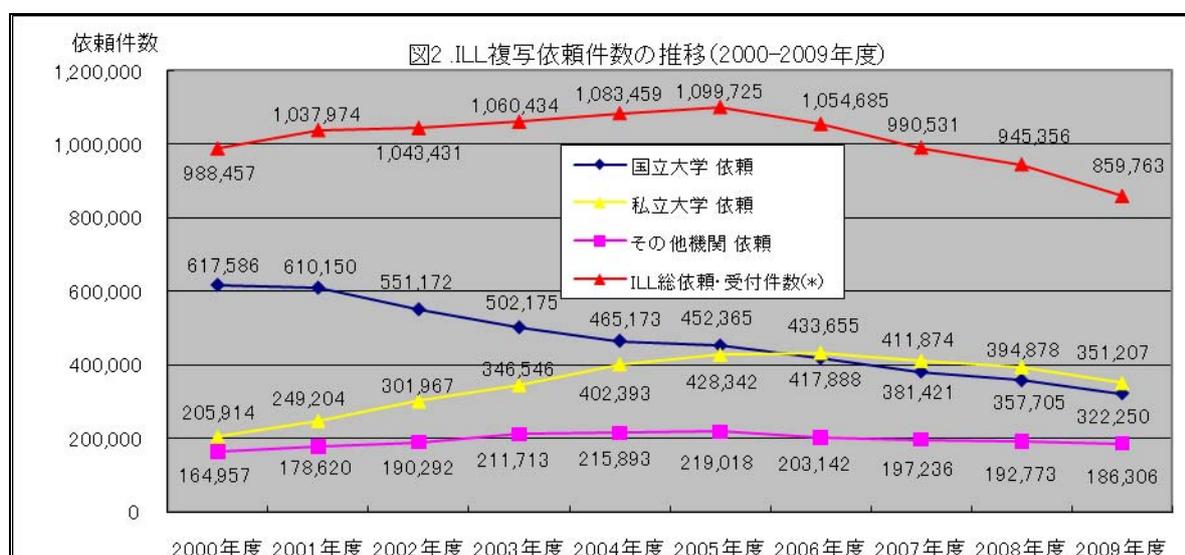
①NACSIS-ILLシステム参加機関・参加組織数

2009年度末のNACSIS-ILLシステム参加機関数は、国立大学は86校(全国立大学の100%)*、公立大学84校(全公立大学の91.3%)*、私立大学548校(全私立大学の92.1%)*、短大、高専、その他380機関である。また、直接のサービス単位である参加組織総数は私立大学、公立大学、その他の機関が若干増加し、合計1,572組織である。(※:設置母数は文部科学省の学校基本調査による)

②ILLシステム経由の依頼・受付件数について

2006年度以降、複写の総依頼・受付件数は減少している。国立大学の受付件数も2001年度以降減少を続け、2009年度はピーク時(2001年度)の52.7%となった。

なお、2006年度以降、依頼件数は私立大学が国立大学を上回ったが、受付件数では差は縮まってきているものの、国立大学が私立大学を上回っている。国立大学が文献複写サービスに大きな役割を果たしていることが分かる(図2・図3)。



(※:「NACSIS-ILL統計情報」では、依頼件数には謝絶件数を含めていない。そのため、総依頼件数と総受付件数は等しい。)

(2) 文献複写サービスにおけるセンター館の機能

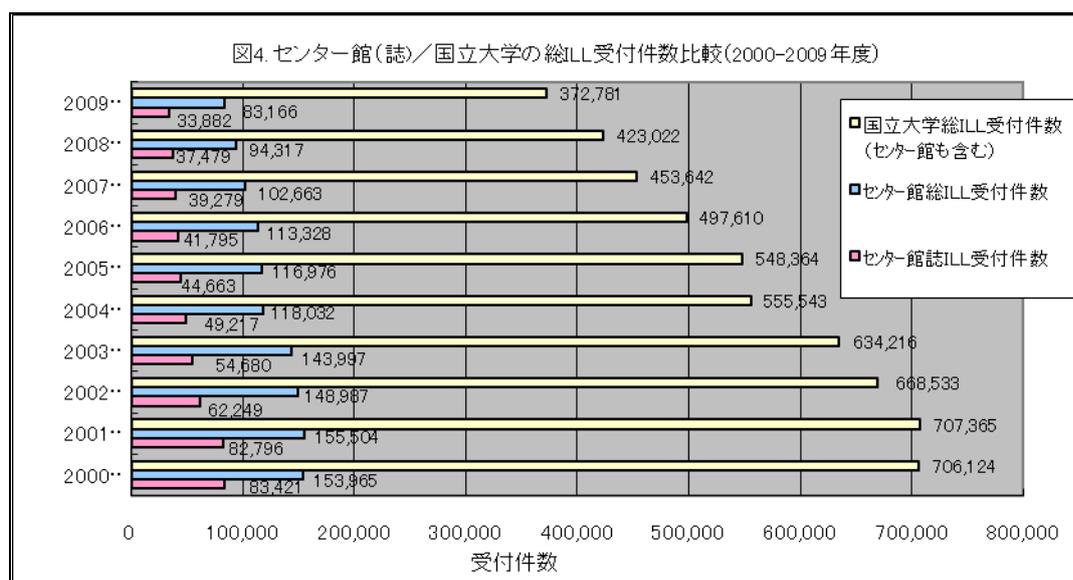
ここでは、センター館の文献複写サービスについて他の機関と比較し、特徴を述べる。

① ILLシステム経由の受付件数について

ILLシステム経由の受付件数・傾向に関しては、2000年度以降ほぼ同じ傾向を示している。

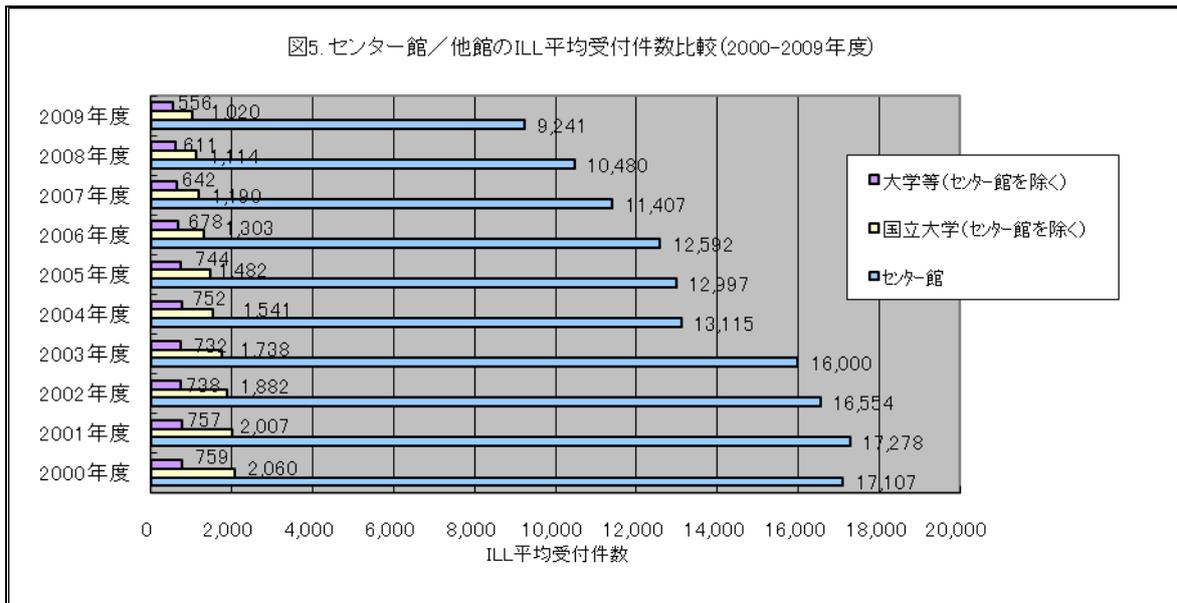
センター館のILLシステム経由受付件数は国立大学の総受付件数と同様に減少し、2009年度はピーク時(2001年度)の53.5%と半分近くになっている。

国立大学総受付件数におけるセンター館受付件数の割合は、2000年度以降常に20%以上であり、2009年度は22%である。また、図1.で示したとおりセンター館誌におけるレア・ジャーナル誌の割合は2003年度に70%近くとなり現在は97%であるが、センター館の受付件数の約40%がセンター館誌に対する申し込みであり、レア・ジャーナルに対しての需要が多いことを示す結果となっている。(図4)



次に、平均複写受付件数を、大学等(センター館を除く国公立大、短大、高専、大学共同利用機関)、国立大学(センター館を除く)及びセンター館の3者で比較する。2009年度末のILLシステム参加組織数は大学等³1,355、うち国立大学(センター館を除く)は284、センター館は9である。3者では1参加組織あたりの平均受付件数に大きな開きが見られる。センター館1館あたりの複写受付件数は、2000年度以降常に他の国立大学の8倍以上であり、2006年度以降は常に9倍を超えている。(図5)

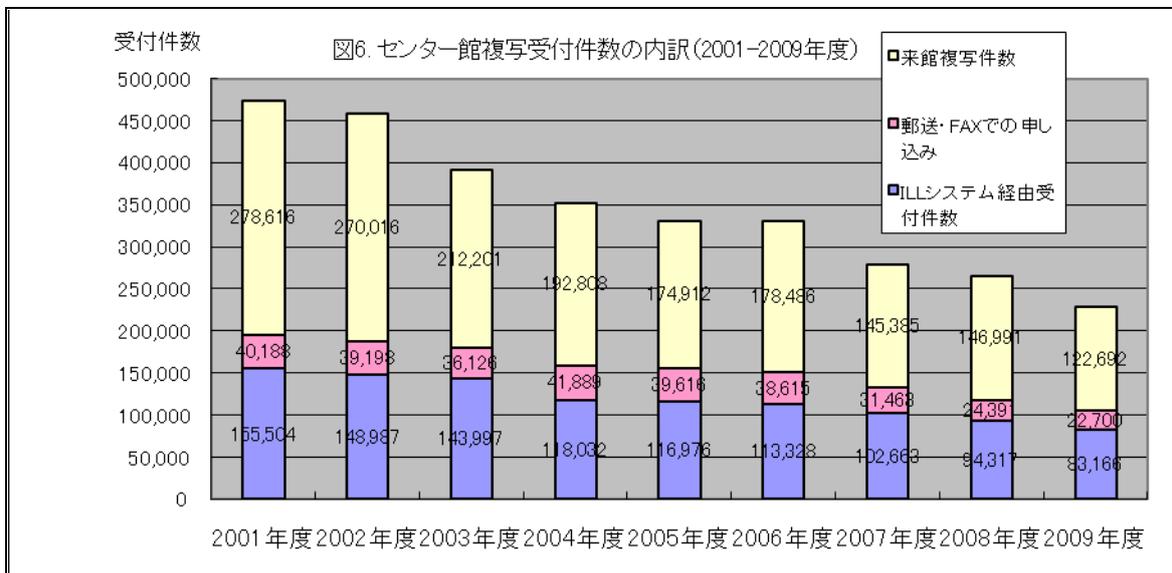
³ 大学等：国公立大学、短期大、高専、および大学共同利用機関



以上の結果から、9館から構成されるセンター館は、学術機関等におけるILL文献複写サービスにおいて中核的な役割を担っていることが裏付けられる。

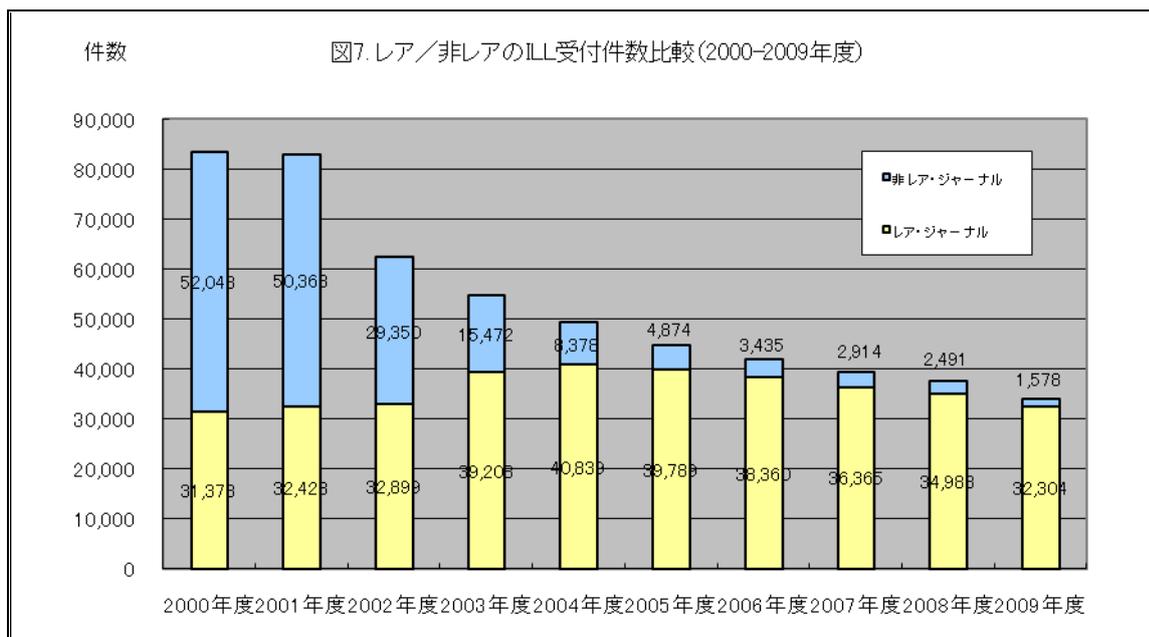
②ILLシステム経由以外の受付について

ILLシステム経由以外の方法(郵送、FAX、来館利用)によるものは、毎年センター館総受付件数の60%を超えている。(図6) また、郵送・FAXによる複写受付の割合は2000年度以降毎年10%前後である。センター館誌がNACSIS-ILLシステムに参加しない機関等の研究者にも、広く利用されていることが分かる。



③ILLシステム経由文献複写サービスにおけるレア・ジャーナルの利用

センター館におけるILLシステム経由複写受付件数は、レア・ジャーナルについても2005年度以降若干減少している。しかし、複写受付件数に占めるレア・ジャーナルの割合は毎年上昇している。2000年度37.6%であったが、2003年度には71.7%、2009年度には95.3%となった。これは「1. レア・ジャーナルの収集について」で述べたセンター館誌に占めるレア・ジャーナルの割合とほぼ連動する。レア・ジャーナルの提供がサービスの中核となっており、また、センター館の収集・整理活動が利用者サービスに効果的に結びついていることがうかがえる。(図7)



以上の結果から、センター館ではレア・ジャーナル中心の資料収集と多様な利用者への文献複写サービスの提供機能を十分に果たしているといえる。

3. 今後のセンター館サービスについて

以上のように、現在センター館は「国内未収集の外国学術雑誌等を体系的に収集・整理し、国内外研究者等に提供する」という本来の機能について一定の成果を収めている。現在の収集方針に基づくセンター誌収集²が確立した2005年度以降は「レア・ジャーナルの収集」、「文献複写サービスの提供」とも安定してほぼ同じ傾向を示している。

ただ現在は、冊子体をメインにセンター館誌の収集を行っているが、今後はレア・ジャーナルの電子化やオープンアクセスタイトルの増加により、収集媒体や収集内容の変化が進み、それに伴い各種サービスの提供方法についても大きく変化することが予想される。また、多くの大学図書館において、電子ジャーナルを含む雑誌購入費の高騰により、各館ごとの従来規模の学術情報の提供維持が困難となる中で、センター館に期待される役割も変化するであろう。

外部環境の変化に対応し、収集した外国学術雑誌による学術雑誌利用のロングテールを実現するためのセンター館の努力は不可欠である。現在新しいサービスの方向についても検討を始めている。